一般社団法人日本書字文化協会機関紙

月刊 書字文化

創刊号

2012　6月号

発行
一般社団法人日本書字文化協会
代表理事・会長
大平 恵理
〒164-0001
東京都中野区中野 2-3-26
第一岡ビル 3 階
TEL　03-6304-8212
info@syobunkyo.org

《目　次》

◇全書研東京年次大会の大会主題決まる・・・・・・・2
◇夏に総合大会　冬に伝統文化大会・・・・・・・・4
◇統一テーマは「ふるさと」―夏の総合大会課題・・・・5
◇角川学芸出版から　芭蕉俳句なぞりがきノート・・・・8
◇もみじ山通信・・・・・・・・・・・・・・・9

書文協とは

旧・日本書写能力検定委員会の二代目理事長・会長を務めた大平恵理、同二代目事務局長・渡邉啓子、指導主任・佐藤貴子らが中心となって、平成24年1月1日にスタートさせました。一般社団法人として公益性の高い運営を目指しており、略称は「書文協」。東京のＪＲ中野駅南口ほど近くに本部事務局を置いています。ビル３階の、青地に手書きの「書文協」の看板が目印です。

文部科学省の学習指導要領を遵守した書写、書道の学びを中心にしつつ、また「ことばの力」育成にも力を注いでいます。「書字」は幅広い文字・ことばの学びを示す用語として教育界では古くから注目されてきました。今度の新しい教育課程で言語活動の充実が大きな教育目標とされるなど、時代の要請にも応える形で書字文化を取り入れました。皆様になじみのある言葉として定着するように努力して参ります。

書文協の事業の第一は、書写の学びを中心にした教材や指導法の開発です。本部の付属教育・研究機関として「書写書道専修学院」を置き、中野本部と青梅市に同学院教室を開いています。作文教室も併設して開いており、ご好評をいただいています。

事業の第二は、全国各地での講習会活動です。全国各地での展開という点では通信教育も重視しています。

そして第三に、これらの学びの手段として「書写能力検定」を実施しています。検定で一歩ずつ実力アップを確かめながら学びを進めます。さらに検定の成績で段級を付与し、指導者ライセンスを認める事業も展開しています。

最後に、こうした書写・書道の学びの励みとするために全国コンクールがあります。夏に「全国書写書道総合大会」、冬に「書写書道伝統文化大会」を開催します。

テーマは「書字文化の担い手を育む書写書道教育」

第53回全書研年次大会　9月末・東京で

全国の小学校から大学までの先生方の教科研究団体、全日本書写書道教育研究会（全書研、井上輝夫会長＝書文協中央審査委員会顧問）が年に1回開いている年次大会は今年、9月27・28日の2日間、東京家政大学（東京都板橋区加賀）をメーン会場に開かれます。主催は全書研のほか東京都小学校書写研究会、同中学校書写研究会、同高校書道教育研究会。東京家政大学が共催に入り、文科省など15団体が後援予定です。

昨年は京都、一昨年は名古屋で開かれ、両大会とも全国から４００人を超える先生方が集まりました。今年は福島が予定されていましたが、3・11の東日本大震災の影響は大きく、急遽、東京での開催となりました。

参加者は書写、書道の授業を実際に担当している先生方ばかり。分科会、公開授業、全体会を開き、研究の成果などを巡る議論を繰り広げるもので、書写書道教育の今が如実に反映されます。学校教育との連携を重視する書文協メンバーらも以前から注目してきました。

しかも、このほど決まった大会の主題は「書字文化の担い手を育む書写書道教育」。月刊書字文化編集部としてはさっそく大会運営委員長の宮絢子・東京家政大学准教授（家政学部初等教育研究科）＝写真＝に大平恵理・書文協会長がインタビューしました。

―「大会主題の「書字文化の担い手・・・」は、どういう経緯で決まったのでしょうか。

宮先生　そちらの団体名と同じですね。関係なく決まったのですが（笑）。こんどの学習指導要領改訂で、書写教育にも文化という概念が持ち込まれましたね。文化とつながるとなると書写なのか書字なのか。やはり書字文化ではないかと。最初は文字文化の担い手を・・・、となっていたのですが、昨年の11月ごろから、手書き文字を大事にしていきたいのだから書字でどうだろう、という声が出始めていました。前回、京都大会の主題は「文字文化の扉を開く書写書道教育」でした。京都のような土地柄ですからこれでもいいのですが、ちょっと一足飛びかなという感もあります。京都は古い都として、様々な文字文化が残っていますが、学校教育全体のものにしていくにはやはり書字文化ではないかと。

―書字という言葉は耳慣れないので、抵抗感はありませんでしたか。

宮先生　古くからある言葉なのですよ。戦後間もなくの文部省（当時）学習指導要領（試案）にも出てくるようです。

―手書きの重要性は私どもも声を大にして訴えていきたいところです。

宮先生　言葉を知らない、使えない、書けないという悪循環が続けば、このままでは文化は伝わっていきません。引き継ぎ、引き渡していく人を育てなくてはいけません。そうするときに手書きというのは大事なのですよ。この答申にもその大事さがきちんと書いてあります。（下段参照）

―全く同感です。言語能力をどう養って書字文化振興につなげていくかは、私ども書文協の最大のテーマでもあります。今日はお忙しいところをありがとうございました。

＊

宮絢子先生は一九四七年生まれ。新潟県村上市出身。東京学芸大学書道科を卒業後、教職につき東京都杉並区立小学校２校の校長を務めたのち退任、東京家政大学准教授に就任されました。「わが大学では、計15回の書写教育法の講義を受けることになっています」と初等教育の理論、実践両面にわたるベテランは胸を張りました。

全書研では京都大会後の昨年11月、文科省をはじめ各教育委員会などに対し、小（全科）中〔国語科〕教員の初任者研修では必ず書写を組み入れることなどを要請しました。

◇文化審議会答申（平成22年６月、「改定常用漢字表」に関して）から（４）漢字を手書きすることの重要性＝抜粋

書き取り練習の中で繰り返し漢字を手書きすることで、視覚、触覚、運動感覚など様々な感覚が複合する形でかかわることになり、これによって、脳が活性化されるとともに、漢字の習得に大きく寄与する。情報機器を利用して漢字を書く場合は複数の変換候補の中から適切な漢字を選択できることが必要となる。

この選択能力は、基本的には、習得時の書き取り練習によって、身に付けた種々の感覚が一体化されることで、瞬時に、漢字を図形のように弁別できるようになることから獲得されていくものであると考えられる。

以上のように、（ＩＴ万能に見える時代にも）漢字を手書きすることは極めて重要であり、漢字を習得し、その運用能力を形成していく上で不可欠なものと位置付けられる。

効率性が優先される実用の世界は別として、〈手で書くということは日本の文化としても極めて大切なものである〉という考え方を社会全体に普及していくことが重要である。個性を大事にしようとする時代であるからこそ、手で書くことが一層大切にされなければならないという考え方が強く求められている。情報機器が普及すればするほど、手書きの価値を改めて認識していくことが大切である。

夏に総合大会　冬に伝統文化大会

平成24年度の書写全国大会予定

主催は公益財団法人文字・活字文化推進機構と当団体であることは変わりませんが、書文協元年にふさわしく大会運営を大幅に改革いたします。

改革の第一点は、参加者も主催者側も年中大会に追われる現状を改めるため、開催を年2回に大ぐくりします。第二点は、毛筆、硬筆の両部門、低学年に絞った部門など書写の広い裾野を見渡せるような運営を心がけます。そして、第三に新しい学習指導要領でも強調されている伝統文化への関心をより高める大会にしていきます。

また、夏休みに各大会の課題を練習する書文協本部主催錬成会を各地で開催いたします。大会に臨む緊張感の中で、高いレベルの技能に接し、色々なお友だちと切磋琢磨することで書写書道に取り組む気持ちを強めるよい機会になると思います。

以上の点を踏まえて、年度内のスケジュールを下記のようにいたします。

夏・秋

〈名　称〉：平成24年度全国書写書道総合大会

☆ひらがな・かきかたコンクール（U9＝9歳以下）
締め切り：7月30日必着
表彰式　：10月21日（日）　会場　東京都内
賞　　：特に総合大会の賞として新たに書字文化名誉大賞、書字文化大賞を置き、毛筆・硬筆両部門で総合的に優秀な成績の参加者に贈ります。

☆全国学生書写書道展
（席書の部、公募の部＝いずれも毛筆のみ）＝各地区席書大会は原則8月1日～9月10日に実施

☆全国硬筆コンクール
締め切り：9月10日必着

冬

〈名　称〉全国書写書道伝統文化大会

☆全国年賀はがきコンクール

☆学生書き初め展覧会
締め切り：平成25年1月15日
表彰式　：平成25年2月17日（日）　会場　東京都内
賞　　：特に伝統文化大会の賞として伝統文化名誉大賞、伝統文化大賞を置き、年賀・書初めの双方に取り組んだ参加者の中から成績優秀者に贈ります。書写書道を通じ日本の伝統文化に幅広く取り組むことを奨励して参ります。

統一テーマは「ふるさと」

┆夏の総合大会課題┆

人は誰もが故郷を持っています。それは生まれ、あるいは育った土地だけに限りません。人との交流や書物の中にもそれぞれの心のふるさとを見出す人が多いのではないでしょうか。

ふるさとには飾らない、素のままの自分がいます。そこは人の情とやすらぎ、そして明日への希望に満ちています。3・11東日本大震災という未曾有の困難を乗り越えて2年目の今年、私たち日本人は、もう一度ふるさとを見つめなおし、復興への活力を高めなくてはなりません。そのきっかけとなるような言葉を胸に刻みたいと思います。

今回の総合大会のうち、特に学生展と硬筆コンクールについてはできるだけ「ふるさと」と関連付けた課題を選びました。文字、言葉そして文章を書き込んでいくとき、その言葉の持つ意味を心にも刻み込んでいこうではありませんか。そのことが書字文化の第一歩であると考えています。

ひらがな・かきかたコンクール

硬筆規定

年中以下　くさ
年長　むかし
小1　つきみだんご
小2　はたをおる
　　つるの
　　おんがえし
小3　あおぞらに
　　ゆびでじをかく
　　あきのくれ

（解説）江戸時代に俳句を作った小林一茶の句。俳句は、5・7・5にわけて合計17文字で書く世界一短い日本の詩の形。秋の暮れ、青い空は一層青さを増します。ふと手をのばして字を書いてみたくなるような高くて、広い空。

硬筆規定

毛筆規定

幼児　く
小1　くつ
小2　つり
小3　りか

イラストは　夜川けんたろう

全国学生書写書道展課題 ―― 席書大会の部

幼児　くも
小1　だいち
小2　つながる
小3　生まれる
小4　同じ思い
小5　秋の七草
小6　夢追う人
中1　親愛の情
中2　素顔の自分
中3　歳月の記憶
高校A　慈母手中線

（解説）中唐の詩人、孟郊の「遊子吟」の一節。慈母（じぼ）手中線（しゅちゅうのせん）遊子（ゆうし）身上（しんじょう）の衣…と続く。慈しみ深い母。その手中の長い糸は、遠く旅立つ息子に着せるための衣服を縫っているもの。

高校B　赤とんぼ　筑波に雲もなかりけり

（解説）正岡子規の俳句。季語は赤とんぼ（秋）。筑波は茨城県の筑波山のことだと言われている。雲ひとつない秋の空と赤とんぼの対比が鮮やか。

大学A　叢菊両開他日涙　孤舟一繋故園心

（解説）中国の唐の時代の著名な詩人、杜甫の「秋興」の一節。叢菊（そうぎく）両（ふたた）び開く他日の涙　孤舟　一（ひとえに）繋（つな）ぐ故園の心

菊は「ひ」とも読む。庭の菊が今年も群れ咲いて　異郷で私は涙している　川岸に舟をつないで故郷への思いにひたっているこの私。

大学B　人の世はめでたし朝の日をうけて　すきとほる葉の青きかがやき

（解説）明治から戦後しばらくも活躍した歌人、佐佐木信綱の短歌。朝には、陽光に透ける木の葉の緑が、私の前に輝いている。人の世にあるとは、それだけでなんと祝福されてあることなのか。

―― 公募の部

課題は小2まで
小から中学生は書写の教科書に載っている課題

幼児・小1　さと
小2　やま

全国硬筆コンクール

年中　ひと

年長　とりのこえ

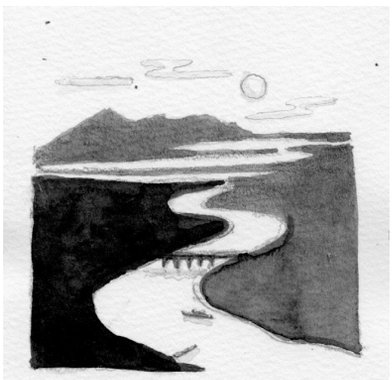
小1　ねこのたまは
だいじなかぞく

小2　とりがなき花
がさく　わた
しのすむ町

小3　行くかわの流れ
はたえずして
しかも　もとの
水にあらず

（解説）約８００年前に書かれた鎌倉時代初めの随筆「方丈記」（鴨長明）の一節。ものごとはどんどんうつり変わっていくが、人の一生も同じだ。

小4　青い海　美しい
山　清らかな川
緑の田畑　日本
のたからもの



小5　子いはく
故きを温めて
新しきを知る
もって師となるべし

（解説）今から２５００年ほど前の中国の思想家、孔子の言行録をまとめた有名な「論語」の一節で「温故知新」の言葉で知られる。故（ふる）きを温（あたた）めて新しきを知る、というのは、昔の人たちの知恵に学び、そこから新しい知識を導き出すこと。それでこそ人の師となれる、と孔子は説く。故きを温（たず）ねて、と読み下す場合もある。

小6　一日に何べんも　友だちや周り
の人の「ありがとう」が聞こ
える生活。人の心がいつもつ
ながっているようで　温かい
気持ちになる

中学　やはらかに柳あをめる
北上の岸辺目に見ゆ
泣けとごとくに
ふるさとの訛なつかし
停車場の人ごみの中に
そを聴きにゆく

（解説）いずれも明治時代の歌人、石川啄木の作。幼年期を渋民村（現在の盛岡市玉山区渋民）で過ごしたが、故郷の美しい自然が心に残したものは大きい。短い生涯に口語を交えた生活詩や三行書きで表す短歌など多くの作品を残した。

高校・大学・一般

まだあげ初めし前髪の
林檎のもとに見えしとき
前にさしたる花櫛の
花ある君と思ひけり

やさしく白き手をのべて
林檎をわれにあたへしは
薄紅の秋の実に
人こひ初めしはじめなり

（解説）明治から昭和初期を代表する詩人で小説家島崎藤村の詩集『若菜集』にある「初恋」（4節構成）のうちの第1、2節。七・五調のリズムが美しい。

「おくのほそ道」芭蕉俳句なぞり書きノート

角川学芸出版が大平恵理手本で製作

草の戸も　住み替る代ぞ　ひなの家
夏草や　兵どもが　夢の跡
蛤の　ふたみに別れ　行く秋ぞ

俳句雑誌では最大手の『俳句』（角川学芸出版）＝写真＝が創刊60周年を迎えたのを記念して6月25日発売の7月号で、おくのほそ道の俳句のうち芭蕉作53句のなぞり書き練習帳を同誌の付録として発行します。なぞり書き手本の作者に大平恵理書文協会長を、との同誌の要請を受けて書文協は製作に協力することになりました。同誌は発行部数6万部を誇っており、書文協は古典俳句と書写を結びつける運動を進める好機として期待しています。

「月日は百代の過客にして」・・・の序文で始まる「おくのほそ道」（注・中学校教科書表記による）は、日本の古典では最高とされる紀行文。作者は江戸の元禄期に活動した俳人、松尾芭蕉ですが、収められた俳句には随行した弟子の曾

良らのものも含まれており、芭蕉の発句とされるのは53句。この全句を大平会長が手本書きします。読者は、平明で品格の高い書風でファンの多い大平恵理会長の手本で芭蕉の名句をなぞる楽しみを得ることになります。

小学生から古典を！

新学習指導要領で、学ぶ内容として「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」が新設されました。小学校3・4年では「易しい文語調の短歌や俳句について、情景を思い浮かべたり、リズムを感じ取りながら音読や暗唱をしたりすること」が挙げられています。

新学習指導要領は小学校では昨年度から始まり、中学校では今年度から教育課程に反映されます。このため小学校の国語教科書はかなり様代わりしました。教科書によっては3年生から百人一首が20首も掲載されているものもあります。

まずは何度も音読します。本を見なくても言えるまで何度も音読します。音読して暗唱、が俳句や短歌に限らず国語の学習として奨励されています。

この音読、暗唱は書写の学びにも大切なことです。毛筆も硬筆のペンやえんぴつで書く場合も、文のリズムをつかむことが上手になる基礎だからです。

もみじ山通信

このもみじ山通信は、書文協ホームページ「書写の森」にリンクしているブログの名前です。ブログのリンクが切れたままでしばらく更新されていず、すみません。ブログは内部からの投稿に限っていますが、この月刊書字文化のもみじ山通信は、会員からの投稿も歓迎します。内容、長さは自由ですが、編集によって加除があることをご承知置きください。

（月刊書字文化編集部）

◆身を砥石にかけて

私の師匠、ある彫刻家の話だ。彫刻を制作する場合、粗彫りから細かい仕上げ彫りへと進み、さらに磨きあげるのが一般的だそうだ。１００番の粗い砥石からから３０００番の細かい砥石を使い分けて磨き上げる。その過程で、傷が残っていれば、また低番の砥石を使って磨き直しをする。途中、躊躇することなく磨き直しをすることも大切だという。腕を磨くこともそれと同様のことかもしれない。低番の砥石を適当にかけないことが、磨きあげる過程で重要だと教わった。（たろう）

◆がんばれ！ゴジラ

どちらかというとアンチ巨人だが、王・長嶋は好きだ。まさに、我等が時代のヒーローだった二人。その思いは今もさめず、彼らの動静はなんとなく気にしている。

今一人、元巨人軍だが心から応援したい選手が現れた。米大リーグのタンパベイ・レイズとマイナー契約を結んだ松井秀喜外野手だ。押しも押されもしない巨人の４番。風貌からゴジラが愛称だ。２００３年に大リーグのヤンキースに転身。２００９年にはニューヨーク・ヤンキースを世界一に導き、ＭＶＰ（最高殊勲選手）に選ばれた。しかし、すでに盛りを過ぎたと見たのか、守備の難が災いしたか、大リーグの評価は厳しく、その年の暮れにはロスアンゼルス・エンゼルス、さらに翌年はオークランド・アスレチックスと渡り歩くことに。初めて無所属選手として迎えた２０１２年、４月末になってレイズとようやくマイナー契約した。

マイナー契約とは、言ってみれば２軍選手としての契約で、新人選手やメジャーから落ちこぼれた選手が最後の望みを託して結ぶ契約。あの大打者、松井がねー、と海の向こうからの報道に驚いた。どうしても野球を続けたい、もう一度メジャーに挑戦したい、という熱い思いからの行動のようだ。６月には38歳になる松井。現役選手生命も終わりに近づいていると言ってもいい年齢だが、その言動は清々しい。陽の当る道を一直線に駆け抜けた王・長嶋は、ジャパン・アズ・ナンバーワンと言われた高度成長期の記憶と重なるが、松井こそ現代日本のヒーローにふさわしいのではないか。傷だらけになっても、ネバーギブアップの大国・ニッポン。その不屈の精神と矜持こそが今必要だ。

松井がマイナーリーグを勝ち抜いて、再びメジャーのグラウンドに立つ日が来ることを心から願っている。（怪傑ゼロ）

◆コンクールの宝

大好きな桜の舞も終わり、水の季節を迎えます。雨でも沢山呼び名がありますが、嬉しかったり、悲しかったりして流れる涙、何かに必死に取り組んだ時の汗・・・も水の様々な姿ですね。

これからコンクールの季節もむかえます。そんな時に流れる汗や涙は、みなさんの宝物の一つになっていくでしょう。

私どもは、一枚いちまいの作品から皆さんの取り組みを感じることができます。とても有難いことですし、嬉しいことです。

その一枚いちまい、お一人おひとりを大切にしながら取り組んで参ります。

また、講習会・錬成会は、皆さんや私どもの出会いや交流の場としても有意義な取り組みができるよう努めてまいります。

徐々に広げていきたいと思いますので、どうぞ書くこと・交流することの楽しみも含めてご参加ください。連休後、大阪の講習会に行ってまいりましたが、沢山の生徒さんたちが熱心に食いついてくる気迫に打たれました。

今年もどんな作品や皆さんに出会えるのかとても楽しみにしております。（啓）